



図書館だより



ビブリオバトル 全校大会が実施されました！

9月20日の昼休み、図書館でビブリオバトルの全校大会が、実施されました！ 1年5組星野くんと、2年4組藤巻くんの一騎打ちが行われ、激戦の末、藤巻くんの紹介した『君の顔では泣けない』がチャンズ本に決定しました！ ただ、県大会当日(11月6日)がサッカーの試合と重なってしまう関係で、県大会には星野くんが出場することになりました！ 皆さん応援よろしくお願いします！

☆近藤先生(国語科)のオススメ本 紹介☆

遠藤周作『沈黙』 ～日本的「ミッション」インポッシブル～

私の紹介したい本は、遠藤周作の『沈黙』である。——時は、江戸前期。イエズス会の宣教師・ロドリゴは、禁教下の長崎に降り立ち布教を始めるが、奉行所に追われる身となる。処刑され殉教する信者たちを前に、彼はひたすら神の奇跡と勝利を祈るが、神は「沈黙」を通すのみ。やがて彼は、信徒・キチジローの裏切りによって捕らえられてしまう。棄教か、殉教か……絶望を前にして「沈黙」を破った神。そして、彼が得た本当の教えとは！？ ——

本来の読書案内なら、これで十分であるが、あえて私はこの小説に登場する長崎奉行・井上筑後守の言葉に注目したい。

「(中略)五島や生月の百姓たちがひそかに奉じておるデウスは切支丹のデウスと次第に似ても似つかぬものになっておる」

「やがてパードレたちが運んだ切支丹は、その元から離れて得体の知れぬものとなっていこう」

「日本とはこういう国だ。どうにもならぬ。なあ、パードレ」

私は、筑後守の溜息交じりの言葉の中に、日本の宗教的土壌の本質を垣間見た気がする。日本にキリスト教が伝来してから約470年。何人の日本人が、「真の」教えに到達したのだろうか？ 語弊を恐れずに言えば、わが群馬が誇る偉人・内村鑑三や新島襄など数える程しかないのではないか？ 筑後守の言う通り、大抵の教えは日本的に改変され、「真の」伝道(ミッション)は不可能(インポッシブル)だったのではないか……

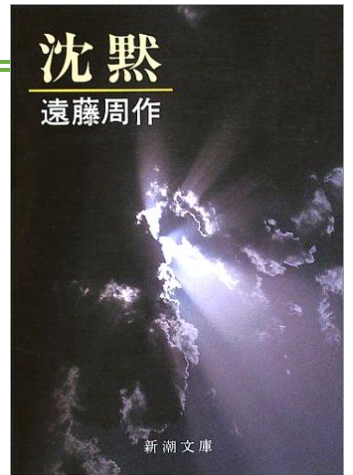
しかし私は、この日本の宗教的寛容性こそ、世界に注目されるべきものではないかと考えるのだ。

近年、トランプ前大統領に代表される白人至上主義や ISIL のイスラーム原理主義など、時代や人々に合わせて教えを改良・改変してきた従来の教義に反抗する形で、原理主義が標榜される事態が多々見受けられる。多文化社会を破壊しかねない悲劇の数々に激しい怒りを感じる一方、私は日本の宗教的寛容性がこれらの問題を解決する一つのモデルになりうると強く感じる。「経済大国ニッポン」に限界が近づいている今、思想の面で世界平和を目指す「ミッション」は「インポッシブル」ではない、そう私は思うのである。

(遠藤周作『沈黙』1981、新潮文庫 より)

沈黙

遠藤周作



新潮文庫

人生という本には、後ろの方に答えが書いてあるわけじゃない。

——チャールズ・シュルツ——

※マンガ『ピーナッツ』の生みの親。スヌーピーは今も愛される世界的キャラクター。

